

38

問

「戦争遺児」はどのように利用されてきましたか

一九五〇年代には、父や兄が戦死した戦争遺児の靖国神社参拝が全国的に行われた。その時代は朝鮮戦争があり、アメリカ軍による再軍備化や自衛隊の創設が進められた時代だった。遺児参拝は、戦死した父を英霊・尊い存在として心に留めさせ、太平洋戦争の時代を肯定・意義あるものとして捉えさせることを狙ったものであった。

戦後の靖国神社遺児参拝

以下、大阪府の例を紹介しよう。一九五二年に日本の独立を決めたサンフランシスコ講和条約が発効し、その記念事業の一つとして遺児参拝は始まり、このうち五九年まで続いた。一九五七年まで年二回の参拝が行われたが、筆者も参加した五八年の遺児参拝から年一回に変わり、その年は九七五人が参加した。筆者の場合、父の戦死が一九四五年、靖国神社合祀が五七年で、翌年の遺児参拝は中学三年生の時だった。旅費・宿泊費の負担は、「全額府において負担」となっていた。また一九五三年から戦死者遺族の靖国参拝のために国

鉄（現在のJR）乗車券の五割引の制度が始まった。参拝は大阪府が大阪府遺族連盟（のちの大阪府遺族会）に委託した事業だったが、大阪府民生部世話課が実務を担当した。また参拝する遺児は「靖国神社合祀がすんだ遺児に限る」となっていた。参拝期間中の学校は出席扱いだった。

靖国遺児参拝は全国的にも行われた。当時の遺児参拝の記録は「靖国文集」として残っている。文集は『靖国の父を訪ねて』という同一のタイトルで、全国的に同一步調で行われたことがわかる。遺児参拝は一九五二年に始まり、六〇年ころには一巡して終わったと思われる。

一九五〇年代は、ひとつ間違えば日本は他国との戦争へと向かうかもしれない戦争の危機の時代だった。そうならないれば、戦争遺児たちは再び銃を持たされ、戦争へ動員されていたかもしれない。参拝の時、戦争遺児たちは「この靖国神社は、お国のために亡くなられたあなた方のお父さんやお兄さんの英霊がお祀りしてあります。この国がある限り、あな

た方のお父さんの名は後々まで残るでありましょう」と宮司に聞かされた。父のいない悲しさと寂しさをずっと抱えこんできた子どもたちは、戦死した父の死の意味付けを与えられた。以下の引用は当時の大阪府の『靖国の父を訪ねて』（一九五五年）の中学三年生の作文である。

「大きな鏡の前に私たち一同は座った。この鏡の中にお父さんがいる。私はじっと鏡をみつめていた。「お父さん」と、小さくよんだ。目頭があつくってきた。あつ

い涙がほほをつたった。鏡がくもって見えなくなった。」

「僕は誰にともなくむやみに腹が立った。畜生、誰が父を殺したんだ。世界中でただ一人しかない立派な父を誰が海底に沈めたんだ。（中略）



遺児参拝時の靖国神社での集合写真（筆者は最後列右端、一九五八年）

あたりに誰がいようがいまいが、おかまいなしにくやし涙がとめどもなく頬を伝った。（中略）鳥居の所まで出た僕は、わすれ物に気がついて二、三步引き返し、しゃがんで下の玉砂利をひとにぎりポケットに入れた。」

戦前の遺児参拝

戦前の遺児参拝は、軍人援護会が一九三九年から四三年まで毎年一回、全国の都道府県・海外植民地（台湾・朝鮮など）の戦争遺児の靖国参拝を実施し、総計一万八〇〇〇人が集められた。参加は小学校五・六年生だった。軍人援護会は軍人援護の組織で、戦没者の遺族、負傷した軍人とその家族などに対する物心両面の援護を行った。一九四三年の第五回参拝には、全国各地から四八五九名の遺児が参加した。一九四四年からは戦局の悪化と米軍の空襲の激化で参拝事業は中止され、各都道府県の護国神社参拝に変わった。

戦前の遺児参拝は、米軍の占領期を除いて敗戦を乗り越え戦後に引き継がれていった。（松岡 勲）

〔参考文献〕一ノ瀬俊也『故郷はなぜ兵士を殺したか』（角川書店、二〇一〇年）、松岡勲『靖国を問う―靖国集団参拝と強制合祀―』（航思社、二〇一九年）、斉藤利彦『誉れの子』と戦争―愛国プロパガンダと子どもたち―（中央公論新社、二〇一九年）

Ⅶ部

戦後史のなかのなまびき子どもたち